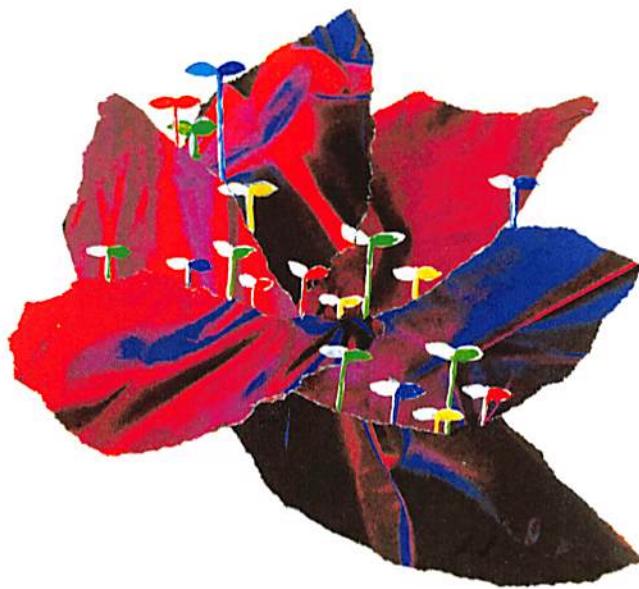


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022.11



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力。——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二三年十一月号（通巻七七四号）

◇今月の二十首詠……茂樹さんの見た風景 藤森巳行 2

■作品[A] 高尾恭子・高津砂千子他 高橋光代他 48 46 4

A C B A

高橋迪江他

高澤匡子他

今村叶子他

福島三重子・藤田しん子他

山田英子・山野ひかり

田土成彦

香川進の生きものの歌 49

「赤堤往来」第5号より（「地中海」昭和31年7月号添付）

松谷公汪

◇今月の二人 243

私と短歌との出会い 34

● 追悼・菊岡栄子 ●

菊岡栄子作品二十首選

追悼文

内田泰子・間野春美・田村利子

中村博子・田土才恵

中村博子

クリップ……88 神田通信……表3

シリーズ「第一歌集を読む」を始めます

（編集部）

86

母が大切にしていた地中海の皆様へ

最近の歌誌より

（編集部）

85

久我田鶴子

18

オリーブ集……玉井綾子

18

A…………もとむらしげと・小原香里

B…………永田進一・藤田しん子

C…………滝田靖子

64

■九月号作品批評

A…………もとむらしげと・小原香里

63

■歌壇月旦

「短歌ブーム」らしい

63

■遊覧寄港（北稻八間のいわれについて）

岩里周英

37

送風塔

藤森巳行

46

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子 44

（表紙デザイン）Takao Yamada

茂樹さんの見た風景

藤森 巳行

茂樹さんの見た風景にあひたくて学童疎開の伊那に向かひぬ

JR東と東海境界は飯田線の辰野と知りぬ

天竜峡木ノ下駅に着きにけり駅前広場に人影はなし

敗戦後七十七年の伊那谷は学童疎開の後を留めず

東京の父母恋しと仰ぎしか山脈染めて沈む夕日を

送り火の跡を留める軒先を避けて街道ひとり歩めり

学童が疎開で過ごしし嶺頭院れいとういん七十七年前の現実

おせい日ひも寺参詣の人少なし手持ち無沙汰の住職と語らふ

昭和十八年生まれ。
銀座グループ所属。

秋葉に『無冠集』『多宝集』がある。

学童が寝起きをしたる本堂は四十年前建て替へられし

疎開の地で死んだ少女のこと思ひ両手合はせる寺の本堂
岸に立ち見下ろす我に何語る天竜川の流れは静か

村人に守られ疎開の児童等は河原に下りて遊ばずといふ

茂樹さんの「黄金記憶」に綴られた歌を頼りに箕輪を歩く

街道を少し歩けばセブンイレブン牛丼すき家の店に出会ひぬ

一時間に一本の電車に乗り遅れ天竜峡の駅に佇む

乗り遅れ無人の駅舎で「地中海」開けば遠く風の音する

小雨やみ霧のぼりゆく山間やまざかの伊那谷の町に別れを告げる

人生の課題を一つクリアしたそんな思ひで伊那谷後にす

一時間連絡待ちの岡谷駅待合室を独り占めしてゐる

悲惨なる学童疎開の現実を今に伝へる「黄金記憶」

作品

A

高 尾 恭 子 遣 児

・大

滝 田 靖 子 夏

・新

懨なき父まぼろしとシベリアの野末はるかに汝はたどりぬ
書類上道児の八十路よ草あわす祈りを蓮は蓄む
頬あかき嬰児ねむれ蓮の花ばんと祝祭の歎をひらく
紅を刷く女子ならね蓮池をめぐるふたりの影長々し
シベリアの鉄路を指になぞりつづ汝のはなしは凍土をはしる
來し方は四字熟語には收まらぬ問わず語りの昭和の戦さ
いっせいに鳴きやんだ蟬そのあとを七十余年のじじまは続く

高 津 砂 千 子

入道雲

・風

田 土 成 彦

露 座

・宙

杖つかぬ身となりあゆむ馴れし怪人道雲もいきおいのあり
正面に宮島棧橋見るはるかしきさはしくだる百十六段
留守の間に伸びたる庭のあら草は地の熱はつか奪いくるるや
庭くまの紫式部はじめての実をつけたりき葉月のなれば
センターの被爆II世のアオリイはこんもり繁り雨つゆはじく
緑に置きしサンスベリアの鉢植になせかほおずき育ちているも
恒例の「能を楽しむ」案内来ぬしづかに動き始むるわたし

片腕の欠けたる露座の石仏にひととき通り雨のすきゆく
幾百年過ごしたまふや露座仏の微笑みはつか残る口元
手の届く範囲は人に高枝は鳥に無花果分けて実を持つ
巣線の路面を「はるか」通りゆく大阪都心「福島」駅前
六十年前には洗濯板があり金だらひを前に母使ひるし
粉石けんと洗濯機どちらが先なりやハードとソフトのこの絡み合ひ
クーラーをつけずに過ごす夜が来て日本は確かに秋に入りたり

田 土 才 恵 漁り舟

・宙

中 島 央 子

草 原

・森

遠見ゆる夜の観光船ゆっくりと光の塊の向き変えてゆく
夜の湖面移動してゆく観光船遠みにしばし晩夏を涼む

這う虫の動きにも似て観光船灯すあかりの夜の湖わたる
みずみに漁り小舟のぼつねんとわが視野のなか黒く動ける
ひよいひよいと時おり動き漁る人飽かずながむる湖岸に遠く
漁りいる魚は知らず絵のことく小舟に人のシルエット見ゆ
わが期待うらはらにして近江富士湖に白帆の一舟もなし

玉 井 純 子 夏休み

・羊

永 塚 節 子 実 平

・銀

三年ぶりに帰国した友がスイスには蝶はないとマスクして言う
この三年を語り合いたくもベンチには三年張られっぱなしのローブ
玄関に今朝もまだある蝶の死骸 家族みんなが「知ってる」と言う
夏休み明け朝顔を抱えたる保護者幾人通学路に見る
休み明け学校に戻る朝顔の鉢 花数の差の著し
熱帯夜のタイムスリップ信号を見切ったはずがまだ赤のまま
重慶の山火事未だ収まらずスカイツリーにまで飛び火する

虎 谷 信 子 友ありて

・伴

仲 西 正 子 コロナさざ波

・沖

友ありて たきる心にあくがる。夜明けをたたく 雨の間ながら
淡あはと 愛の過歴告ぐる汝、子育てもなき ひと代のうちに
愛人といふなる絆 さやかなり。かく安らぐを うつくしと見む
グラス乾す 悲愴にあり。らうんじの深きかけりに 指扣はせて
衝撃といふべき程を 胸に持ち ひとりの夜の渴き果てなし
酔ひののち そを秘めごとと言ふ勿れ。蠅の焰の 終の証と
女史とは哀しきものよ。相剋に 離かるることの あまりに多し

残暑なにするものぞと川岸の青草原に夕風わたる
とよもして白雨過ぎたる電線に雨粒水精ならぶよ並ぶ
戦ひの後を生きぬき七十七年燃えがらのことき青春がある
エスエルの鉄橋わたる簞笛に蘇闇の日々のまたよみがへる
いちめんに遙の白花咲きそめて朝の車窓にこの世ともなき
タイシルク旅に求めて幾十年ロングドレスは宙吊りのまま
人に逢ひ人と別れし日を重ね青草原の風に吹かるる

白子れい 花ばな

・落

檜垣美保子 晩夏

・昂

背空にふんわり白き雲つかぶ朝の疏水路背黒せきれい
いで会える人の少なき朝の路こころ浮きうきひと日のはじめ
仰向けに蟬の亡骸ここ彼処ころがりており夏も終るか
コロナ禍にこもりいる日々続きて語る相手は庭の花ばな
樹々の枝みどりこき葉をしげらせて庭せばめおり白百合の咲く
散り落ちし小花揃く間も枝の揺れまたもこほる百日紅の花
誕生日九十五年をふりかえる恋に戦に耐えて来し日々

ばばりょうこ

花に惹かれて

・鹿

あの花は何の花かと通りすがりの花に惹かれてしばし立ちたり

山間のとある民家に真ぐに立つ木の花に呼ばれ訪いしかつての
名を問え巴桐の花とう紫にけむるが如き夏の初めの

春の季満てば脳病むまなうらに紫けむる花を恋おしむ
日射し強き庭の手水をぬるませたハスの葉がげに息ひそめいるメダカ

傘かけてやりましたこのただならぬ猛暑にあえぐメダカたちに
この一夏どしゃぶりはたまたま猛暑なり乗り越えましょう！五匹とふたり

浜谷久子

救急車

・地

隣人に呼ぶ救急車親しくとも他人の一線意思の疎通も
明確な意思で連絡待ちくれと搬送される独居の人は
警察も来て問われいる状況と関係負傷の事件性検証
手当て受け無事に帰宅の隣人の頭の包帯思わぬ転倒

胃痙攣に緊急搬送されたこと動けずまさかと私もかつて
搬送の病院終の場所となり父母家に戻せぬ悔しみ
鬱病の友より届く佃煮はひと手間ふた手間かけるゴーヤの

福田庸子 外来種百合

・今

啼き声の一音余る鶯に再会の寺四十年経て

うぐひすも訛あるぞと笑ひたり里山ぐらしを楽しみし亡夫

幾世代継ぎきし声か鶯のしみわたりゆく寺山の奥

みやびなる名に細面はなびらの白さけざやぐ高砂百合は

温暖化を一身に受け白花の去年より早く筒を尖らす

舗装路の隙間透ぶは見事なり特定外来植物タカサゴユリは
道端に勢ひ伸ばし太太とめぐりを覗む外来種百合

藤田美智子 ベンギン

ペニン

・新

足裏を平たく冷やしくるなり母の形見の津軽塗下駄
傷つけてしまひことに傷つきぬ葉裏ばかりを風は見せくる
耳鳴りに悩める君には聞こえない玻璃をふるはす鈴虫の声

常よりも口数多くなりゆけり苦手と思ふ人と向かひて
花びらのかたちにならずしほみゆく朝顔を打つ一陣の雨
一匹の蝶を追ひかくるベンギンの飛べないことを知らぬ明るさ

何歳のときの自分が好きですか 六十九歳の今と答へる

隣人に呼ぶ救急車親しくとも他人の一線意思の疎通も

藤森巳行

三十八度

銀

マスクして顔半分が隠れてる行き交ふ女性はみな美人なり

孫娘毎日塾で十時間受験勉強挑戦の夏

雨上がり蟬の合唱始まりぬ地上の命惜しむがごとく

玄関を一步出たなら立ち眩み三十八度の外気に触れて

温暖化といふよりは灼熱化地球はだんだん壊れてゆくか

人類の進歩とふ名のもとに地球を傷めた付けに苦しむ

幸せは自然とともに生きることエス・ディ・ジーズその目的も

船田清子

フットと吹き出せ

天

盆を期に蟬一声も鳴かぬなりいかにして知る季の移ろひ

勝手なる人類あての忠告や猛暑に豪雨地獄恼ます

次々と線状降水帯は流れ来て水が引くなりまた水が浸く

空は秋うす水色の晴天に綿雲三つほわりと浮かぶ

大阪に住まふ幸せかみしめて被災の苦しみテレビに見入る

きりきりすはた馬追ひにこぼろぎの奏づる宵々絶えて幾年

踏み出だす前に少女よ一呼吸フッと吹き出せ心のしごり

牧雄彦

わが友

大

友が描きし水墨画に似る小倉山墓のそがひにけぶりたるなり

友逝きて早や十一年そのうちに平田も夏原もこの世を去りぬ

尾道の商人宿に雑魚寝して昼間は絵を描くはたちのわれら

大学生われら貧しく一杯のコーヒーで二時間語りあひしよ

君とわれの持ち金数へその夜の汽車で旅せり青春時代

安宿に泊まりたれども楽しくて初めてスキーをせしも思ひ出

七十三歳に逝きしわが友いまあらばまた信濃路を歩まむものを

松浦楨子

二僧図

羊

粹狂の二僧ありとぞ風に聴く等を持ちし寒山拾得

奇行多き唐代の二僧愛されて千年越ゆも画題に遊ぶ

激石師描きし「觀月二僧図」の絵ハガキ求む両廊の隅に

寒山寺に寄らで過ぎたるある時の旅にうつくしき蘇州の街角

ロマン匂う蘇州の水路思い出はおのずからなるほほえみ浮かぶ

池の面に影置く松に脚立かけ若きひとりのほつ枝切る音

退院の日にもこより眺めたる港の見える丘の公園

松瀬トヨ子

珊瑚

沖

梶子の白く吐く息宵闇に瞳となりてわが家の垣根

演説のくぎりある度拍手わく県知事選を車内より聴く

画面にみる栗木京子福々し春風そよぐひとりの部屋に

歌を評す栗木京子の「言い過ぎ」と「言い足らない」にしぶきを浴びる

麻痺の手にペンを握りて歌を書く寂しくあれど楽しくもあり

ひと文字の誤植のありて民謡の変りし内容の歌を見つめる

拾い来し珊瑚のかけら耳にあて亡き母の声父のこえきく

松永智子

閑

嵐

あかあかと沈む落日にんげんのことばに閑はりなきままにして

かなしみてこぼしことばかなしみて拾ふともなく仰ぐ夕焼け

読むたびにこころ覚める歌の集灯のもとにただ読みつく幾夜

青白く螢火ひとつともる闇夜ごとめざめ見るとなく見る

父のよはひ母のよはひをとうに越え何きくとなくきく闇の音

夜のふけの闇のぼりくる昇降機の音しづかなりふたたびの闇

人の声物の音のいまだなきあかとき間にさめてきく音

三 浦 好 博 憲法前文

・純

御代田澄江 戰火長引く

・純

・茨

向日葵の首はやさしもこの頃は首桶ばかり見させられて
たちろげる我はにっぽん人なるか「國家、國民、國歌、國葬」
父に似て伸びやすき眉白くなりこれも白眉と誰が言ふなり
おのが死を見つめるにあらず人はみな沈みゆく陽を追ひてゐるだけ
ふるさとの盆に帰りき長旅の我らに母のリボビタンD
我が顔もさだかに見えねば煩よせしふるさとの母の晩年思ふ
ボランティアの納涼会にさへ我は憲法前文朗詠したり

宮 本 靖 彦 水 禍

・凌

東北道潰滅の水禍がうがうの画面水音テレビをゆらす
辻田の最上川沿ひ大洪水「集めてはやし」と翁も詠みし
東日本荒らしし猛雨の尻切れが今大阪に古屋根叩く
四頭の黒龍猛く西空に今夜大坂夏の陣なるか
アクアマリンの輝きをもつ夕雲に広島供養日耗びつつ歩む
試みに植ゑし西瓜の二苗に一個の大顆子孫よび貰づ
チャイム二度鳴らすを帰宅の合図とする日日なれど互に安堵す

三 好 聖 三 戯 歌

・伊

張りぼてのおおきゴリラも怪人も萎えて俯くこの夏の暑氣
この暑氣に疲れてわれも描たどり何はともあれ冷房の部屋
懶見の窓の庭にもひらきたり直立茎のキバナコスモス
鉛筆と紙さえあれば出来るって?簡単なんだ三十一文字は
読み進きて「地獄探し」という言葉知りて思わず唸ってしまう
家の内に尿かけあるく猫たちを叱りてのちの背息吐息
秋の気を統べる気風を見せながら鳶は無窮の青空を舞う

江田島の兵学校出で南海深く睡れる義父に持らむ夏来ぬ
高空を斜めに切りて銀色に光る機影が遠ざかり行く
ウクライナの戦火の悲惨長引きり写経為す間も胸痛みつ
ウール束子に手力を込め思ひきり鍋釜磨く怒りの如く
雨止めば雉鳩啼けり高みより一声三声リズムを持ちて
巣と巣双方二十五画文字巣眼々し巣暗々し
紫や藍の着物をリメイクし装へる友は令和の美人

茂 木 番 小 や ん ま

・埼

メニューにある「シャ豚ブリアン」座布団一枚あげたきとんかつ店
草取りの鼻先にきし小やんま鍼差しだせば刃先も膾せず
炎天に凹たるわれを嘔ふがに百日紅の花は澆刺
飾られし单衣のきもの碧梧桐の句を染めぬき紫裾濃
細文杉なんぢやもんぢやの木を一蹴われはどんなもんぢやの木ぞよ
仙台育英ひに深紅の優勝旗白河越えを球史に刻む
下関国際二強を倒す進撃も全国制覇への決戦に届す

もとむらしげと

・国 葉

・そ

理不尽の死に黙したり人を死に至らしめしひと凶弾に倒る
評価未定といふより民意を二分する指導者統に打たれて死せり
「たたつ切る」ほどの憎しみを人に持つ実行できぬことゆえ我は
味方には激しく優し敵と見る者には水点以下の冷たき
嘘をつくことを習いとせし者を国民こぞりて弔う欺瞞
「私^{わたくし}は欠席します」という言葉ネットにあふれて今日は国葬

優勝旗をどうぞ通してくださいと白河の神に人ら祈りぬ
長男の嫁が山口産なれば野球対決ありしか憂うる
忍徒の長き幾とせ暗れにけり「白河以北」山百文

わが長女勤めし校よりすすみたる斎藤陽打ちていでたり
白河の閔は東北の入口と旗の頭下げし高校生たち
わが校も「育英」校も戦災に焼かれし記憶ありありと頗つ
この快挙知らずに死にて幾年ぞ「育英」出身の君に香焚く

山下雅子 八月

・習

八月の六日九日十五日をしみじみ話しし師の声しのぶ

「サイパンで父が戦死したの」綾さんとあの教室の静寂が迫る
突然の赤紙に征きしわが父は行方も生死も不明なるまま

父を知る唯一よすがの復員便り聞き洩らさじとラジオ聞みぬ
やせ細り還りし父は三年ぶり北支戦を語ることなく

ひとり姑は統後の日々に祈りしと思息子三人よ戦死するなど
八月は「きけわだつみの声」観し夫学徒の仲間の唯々むなしと

山野幸司

記憶

・沖

幼き日記憶断面揺れ動く洋画に映る男と女

最高の衣装に集う映画祭反戦叫ぶゼレンスキード
インバール作戦を知る戦争を知らない子ども我その一人

敗戦のラングーンの街中に置かれしまでの軍票の山
逃げまどうビルマ戦線その中に大河に飲まる人々の声

戦争の体験者らへ伝うべし戦争知らぬじじとばばでも
沖縄は辺野古に基地が作らるるまた繰り返す日本の盾か

養学登志子

記憶の光

・凌

早朝の公園散歩する鶴あと追う二羽は母似の子ガラス
ストローもてアイスコーヒー一カラカラと音させては吸う肥満なるひと
葉の緑どちがう色した青柿の葉隠れに太る存在を見す

大椿桜若枝の先に実をなし夏日の重み日々にたわめつ
熱に病むおぼろに電話が鳴っているドア開けるころきつと止まるよ

七つ星少しずつ消え今四星あるべき位置の記憶のひかり
駅ホームの湾曲に沿い入り来る十二両の美しくとおし

横田敏子 新盆

・福

終戦から七十七年目の夏となるわが人生はすでにそを越ゆ
コロナ禍に今年はひとりの盆となり戸棚の大皿出番のあらず
去年逝きし妹還る盆近し掲げし灯籠灯りし頃か

いそいそと胸はずませて還り来し妹ならん今日盆の人り
「お帰り」と香を手向けて迎えたり「ただいま」と聴こゆ写し絵の笑み
そよると風の動かぬ屏下がり夢かうつか山鳩の声
高校野球今年は本氣で応援す「白河の閔」越す深紅の優勝旗

炎天下外出 コロナを防がんとマスクの内の熱を息する
線状降水帯地上の川は受け切れず氾濫万里波を走らす
天空を風神雷神かきませて雲地へ落とす泥田篠つく
わが生涯転がる石の九十年この世の泥にまみれて生きる
自然死は手順をふんでお別れす事故死は直前の姿で即死
画数は重き意味なす「鬱・鬱・鬱」つむじ風には颶と表す
すっぽんは28画(麿)龜よりも平たいという意義を加えて

炎天下外出 コロナを防がんとマスクの内の熱を息する
線状降水帯地上の川は受け切れず氾濫万里波を走らす
天空を風神雷神かきませて雲地へ落とす泥田篠つく
わが生涯転がる石の九十年この世の泥にまみれて生きる
自然死は手順をふんでお別れす事故死は直前の姿で即死
画数は重き意味なす「鬱・鬱・鬱」つむじ風には颶と表す
すっぽんは28画(麿)龜よりも平たいという意義を加えて

吉永惟昭 妻の被爆日

・熊

梅本武義 中華の演習

・羊

かにかくに聞きし杳かり記憶探る言葉少なき妻の被爆日
気がつけば廃墟に溢れし被爆者のアビキヨウカンが妻のトラウマ
蚊やり火が送り灯のこと吊られた屍臭の煙にゆれて長崎
救援の医療班到着「頑張れよ」ただれた肌に油塗るのみ
おしゃこでヨモギ丸めた怪葉もうわさにつられ試してもみる
リンパ球また膨れたるかハイネックおしゃれと呼ばれ衿立てゆく
死語でない「原爆使用」をのぞかする七十七年日 妻の被爆日

磯田ひさ子

三 年

・森

戦争を知らない者は本当の平和を語れずといふ われはも黙す
そにどりの青き御衣のかはせみが川の辺にゐて水を啄む
病む夫の検査結果を日々に聴きつつ迎ふ三年目の夏
懸命の燃焼ならむ降りしきる雨の中より蟬のこゑ聞こゆ
長雨に百日紅の強き葉も乾びたる花も濡れて鮮やぐ
ひぐらしの鳴きごゑテレビより流る思はず夫と聴き惚けたり
したたかに胸を打ちたり蹠きて身のほど知らずが身のほどを知る

市原やよひ

庭

・萬

盆明けに初めて蟬の声聞けり正しい夏は何處に消えた
星と夜の顔の異なるおしゃい花輝き始むこの夕つ方
おしゃい花夜は主の顔をして庭の一隅悠然として
物置きも井戸も備えし貸農園猫じゅらし烟になり果てており
雑草も流行り廃りがあるのかな見知らぬ草が庭を占めおり
揚羽蝶しばし留まる我的前何か告げ事ある様にして
うす青きオーブバッタの子が二匹酸漿に居れば立秋となる

大浪美雪 つばめ

・森

成人となりたる孫の帰省待つ人哈醸とビールを冷やし
竹杖をつく散策に出合いたる嫂は晒す滅多打ちして
一雨に地は冷えており床下に今宵コオロギ聞きつつ眠る
農地荒れ跡の増えて人の減る里に感じる日本衰退
破壊する損失ばかり得るはなしロシアの侵略中華の演習
台灣を囲む中華の演習に秀穎攻める家康思う
海峡が堀の役日をする台湾秀穎になき援軍がある

奥田陽子

たつたいちまい

・羊

湧き水のあたりへ降りゆく石段のありて足止む通れるたびに
鳴く声はつづく法師の多くなり木の葉舞いつつ肩を擦りゆく
蟬もまた疲れしならんコンクリの柱に当りて低く飛びゆく
ゆく木を言えはか細き声のする秋近づける夜の電話は
本の間より出で来し便りこまやかに書きくよう亡き友よりの
あの文字のたつたいちまい亡き友のはがきが欲しいただ青い空
星のなき空の墨色これの夜を溺れることき睡りとならん

小野雅子 老い

・羊

北山雪男

・残日抄

キャベツの葉いちまい剝けば朝露かつめたく白き水こぼれくる
 カレンダーの写真にて見るアンダルシアのみどりは草地か畠か
 丈伸びた夏草を倒すやうに吹き朝も夕べも風のやまとざる
 夕景を煙らせて降る夏の雨さびしく今日を終らせてゆく
 老い人の短歌の自在なることにおどろきあがれまた読みかへす
 祖母の過保護で三文安いわたくしが八代の半ばを過ぐる
 灯を消して寝むとしつつ聞きてる北海道に地震のニュース

神田鈴子 戒め

・大

玄関の石段ひとつ踏みはづし黒き地面に叩きつけらる
 しばらくは起き上がりあがれざりあたりには人の影なく胸撫で下ろす
 眼鏡とびレンズに白き傷つくを拾ひて家に慌て駆けこむ
 強打せし右顔面と右の肘、両膝に血の滲みくるタベ
 受診せし皮膚科の医師は前方への転倒なりしを幸ひと言ふ
 仰向けの転倒ならば恐らくは慘事となるむ 身震ひするなり
 うかつなるこの転倒を戒めに明日への道を踏みしめゆかむ

菊地栄子 上山

・湾

屋根低き武家の厨によろがえる昭和を生きしおばたちの面
 描かれし被の扇子の気高さに拭いきれない歳月が積む
 三方を巡らす古き硝子窓櫻の花房波立ちて見ゆ

天守閣の展望台にめまいする高みのめまい久方ぶりに
 見過こてしまいそうな石芭蕉の句碑文字記す杭柄ちまろびたり
 人通り絶えいる橋の向こう側むらさきの藤流なして垂る
 降り立てるみどりの芝生のカラス二羽飽めく翼吸い絡めくる

あなたはれ戦宗病災政貧嘘 二〇二二泥しるき夏
 分析ほか為す術あらぬ眼間に揺れて向日葵 サわわひまほり
 遊びには行けぬ島なり沖縄は叔父の骨片方踏むやも知れず
 满州の土となりたる伯母あるもその末期には触れざり 誰も
 抑止力、否威嚇力 核兵器・クラスター爆弾、科学の粹は
 八月の祈り今年も届き得ず核の共有政治家がいふ
 七十五年過ごして疲労因懲の民主主義とや いま崖っぷち

木村文子 白杖

・羊

一人きり遠足気分 大通り手前の小さな喫茶店まで
 行く道は帰る道なり遠足の空はいつでも晴れ渡りおり
 真っ黒な軍手ばかりと落ちていて鳥かと思ったという声きこゆ
 この辺のむこうは眼科病院でここは私道と声が応じる
 水たまりそこにあり若き菜がたまりし水をみどりに染める
 病院を出でたる少女は青空を見上げることなくしばし佇む
 白杖をそっと歩道に滑らせて少女は見せる晴れやかな顔を

草刈十郎 蝶時雨

・世

早々に明けたる梅雨に八月のやうな六月終りけるかな
 昼寝して夜ともなれば切れ切れにたた聞いてる深夜便をば
 感染の波また波の日本中三年ぶりの祭りをちこち
 オロナミンC買ひ置きしまま逝きし人猛暑の日々に乾きるるやも
 原爆忌今年も来たりて鄧時雨鎮魂歌のこと降り続くなり
 敗戦といはず終戦敗戦を忘れたやうな終戦日なり
 敗戦忌七十七年歿なき希有な平和に生かされてをり

國井節子　墨絵

・春

泣き」とや愚痴はいふまじキッパリと真正面向きひまほりの花
ものすべて恵みの雨を待ちわびるこの日の気温もはや限界
終日をひたすら草を食む鹿よ一幅の墨絵のごとし貌を深くして
小さくとも一人前の鎌を立て獲物捕らへて折りつづ食うぶ
風を待ち風に任せて蜘蛛の子ら糸ひからせて飛び立ちゆけり
いにしへの木簡出でたる高校も廢校となる広き校庭
三年も積り積りしこの埃、大仏様のらぼつの上に

河野繁子

アナロケ

・雁

枯れの見ゆる里山猛暑日の地球の危機がけだるく沈む
QRに読めと放送置き去りにすすめの鉄砲うつのは止めて
ダイヤルの電話でかける市役所の電話は一押せ二押せと迫る
飛行機に乗りて移住の黒百合のさ庭に咲きて北国を恋う
株分けも挿し芽もならずの声よそに玉あじさいのはじける葉月
下穿きに両手を通し被くひとふたりの糧の米二合とぐ
焼きなすを美味しと食みし夏ばての人々に夕べのこころ救わる

近藤栄昭

ボタン

・虹

オックスと言いし時期あり東芝の電気炊飯器出始めの頃

スバルタンXひたすらボタン押すすでに負けいる小四の子に
マグネットロン緊張して聞く装置の名それがチンだと便利なものだ
一の腕が重く疲れるガラケーをスマホに変えて気持ち先端
「指みせて、ああ指紋ない」子の判定指紋認証消して帰りぬ
送金の手順を示す小さき文字選択せよと何せよと何
予定表組んでしまえば指示される今日の予定の時間に追われる

近藤芳仙

さやうなら

・信

リュック背に「まあ暑いになあ」ときたる人手作り帽子のその人も無し
庭先の莢豌豆をもぎくれば彼の日も暑く暗れてをりしよ

若きより習ひし筆に短歌を書き裁縫をせし八十九歳

七月を八月へゆく一ヶ月病みて身籠るあつけなかりし

歴史ながき歌会の長ひきうけて明るくまとめし年月のあり

歌会は今日より寂しあの声もある温かき批評も聽けず

ありのままただ誠実に生きる様追し逝きを受け取らむ吾も

坂上直美

令和四年八月

・天

夏の朝窓も扉もあけ放ち風を入れるれば蝉声もまた

大き息吐きつつ家の事をなす母よあなたもかくてありしか
息つまる苦しきこともありしかと炎熱の日々も過ぎて風吹く
夕暮れはふと君帰ると思うとき風と気がつくまでのひととき
夕暮れは表通りに出でててみん君に似し人歩みおらんか
消ゆるまで見つめておりぬ大文字三年ぶりに人々と濃く
わたくしも生きようと思う雨上がり街の彼方に虹を見たとき

坂出裕子

雀

・洛

コロナ禍の刻にはあれど雀五羽今日も砂浴びしてをり庭に
砂浴びをしたる雀の残したるくぼみに朝のひかり差しをり
ひたすらに籠るほかなし体温を超ゆる熱暑のコロナ禍の日を
いつ果るとも知れぬこのコロナ禍の日は戦争のあの頃に似て
コロナ禍の動かぬ時間とほき日の思ひ出ふとも胸をよぎりぬ
思ひ出の中に生きる人はみなやさしき面に笑みを浮かべて
人に会ふことの少なくなりし日の夕べ飛行機雲は伸びゆく

佐藤道子

日常

・甲

鈴木結志

最勝の生

・福

捨てられしを育てしと言ふ柴犬は我を氣にして離れては寄る
氣が弱いのでと飼主さん気にして我を見つめる大
友達になりたいけれど気が弱く離れては寄るこの犬いと
新しく通ひ始めた眼医者さん閉ぢていました入院されしと
若くして美しき人眼医者さん説明もクリアになさりしものを
散歩にマスク自転車にマスク日本人の証のマスクか
お早うと言へば散歩の笑顔増すコロナ三人皆さみし

篠原まり子

異常気象

・羊

片陰を拾いて行く道ゆくりなく目まいが襲うボストンの前で
生と死を分かつ気温の恐ろしき天気予報の数字が並ぶ
ブラウスに付く鳥の糞笑われて笑い返して惚け老人吾
エントランスに向ひまわりにソフィヤローレン知るは幾人
リンゴジャムたっぷり沈めてロシアティー甘党の父に似たる私
十五夜は異常気象知る知らず熱き真夜さえ静寂の影
エアコンにゆだねて眠るレム睡眠夢は夢なり目覚めの際は

柴田登志恵

紺碧

・天

風の匂ぐ日盛りに白き穂乱雲霞深めゆき紺碧あやふし
あらかじめ敗北定められるしが病と老いに母真向かひぬ
にぎにぎしく暮らしし家に老い母は見えざるものひとり見てゐき
ししむらのかなしみ晒し卸しけく鳴く日を生きぬ卒寿の母は
氣に入らぬ事どもつき言ひ募りそのまま母は逝きてしまへり
とりどりの百日紅咲く並木道母の棺が凱旋すなり
夏蜜柑炎暑の大地にぶき音響かせ落ちて金色かがやく

関根栄子

長江

・埼

アフリカの原産という指ほどの大きさが良きオクラを摘めり
洋名はレディ・フィンガードをおいて太くたくましオクラ二、三本
干ばつに長江の水位下がりしとう船にゆきたる旅の日を恋う
蕩蕩とあの日の大河流れいし白帝城を見上げつつ過ぎし
「朝に白帝を辞す」と李白詠む蜀の劉備の終焉の土地
長江と嘉陵江との合流点重慶より始まるクルーズなりし
優勝旗が白河の闊越えしとぞ空撮にしてテレビに映る

関根和美

しらさき

・埼

廻暮むかえたがわず尾花の穂を見るもああとよろこぶ母の声なき
萩尾花ふじばかま咲くわが庭に桔梗われもこう何故に根づかぬ
いけたれば匂うと不評の女郎花たえてそのままふたむかし過ぐ
七草に似合うは煤竹編かこと若き日母のもとめたるもの
軽くして風情あること愛でいたる母の寵好きあまた遺ざる
用水べりにコンクリはられおずおずとやがてしずしず歩むしらさき
夕空の彼方消えゆくしらさきの棲む國にいる母かと思う